

なぜ身近な家族より ネットで出会った人を頼るのか？

お寺さんの
出番です。

昨年10月に発覚した、神奈川県座間市で「自殺願望者に一緒に死んであげる」の言葉につられて、9名の若者が殺害されるという悲惨な事件が起きた。容疑者は、下劣で卑猥な意図で凶行に及んだと報じられているが、生死にかかわる一大事を、身近な人にも相談できずにいる若者が大勢いるということに、驚かされた。

大手マーケティング調査では、今年の1月現在、SNSのツイッタ一(アメリカのツイッター社のソーシャル・ネットワーキング・サービスで、140字以内で自由にメッセージ・画像・動画・URLを投稿できる)の利用者は、日本では4千500万人(20代・726万人、30代・670万人、40代・563万人)と報告されている。これらの数字を一因で説明することは不可能であるが、身近な人の誰にも悩みやストレスを聞き入れてくれないと感じ、SNSに投稿することでしたか、悩みやストレスを発散できないと決めつけている若者が、数多く利用されているのである。(この項・同朋誌4月号参照)

日常生活の中で、身近な人、家族の感情・心情を聞きとめてくれる場が、家庭であるはずなのに、昨今の家庭は、親身になって聞き止め受け止めてもえらる事が出来なくなった。いわゆる家族崩壊・家庭崩壊・「寝に帰る」だけの屋やと化してしまった。人間以外の他の動物たちにも心の悩みがあるのだろうが、本能で生きているのであって、自死するのは人間のみである。

歴史は繰り返されると云われるが、世の中の動きも同じような事が起きるものだとつくづく思う。私の学生時代に指導くださった先生方は、極東の弱小国から欧米に伍する「一等国」になったという大きな誇りを胸に学問に没頭された先生方であった。ある意味、豪快さを持たれた明治人間であるが、その反面、我が国の敗戦と云う体験を通し学び直しとする姿勢で、自分らの体験を通して学生に接してくださった。

そう云った先生方から聞かされた話に、明治・大正・昭和時代を特徴づける国の動き、個人の価値は軽視され、国家のために尽くす義務責任が強調される時代であった。その当時の青年は、若者らしい自我の自覚と国家からの圧迫に追い詰められ、若者たちは強い不安を抱くようになっていったという。

このような時代の流れの中に突発した、藤村操の自殺事件は、当時の時代背景を物語るものとして、語り継がれている。彼は、当時第一高等学校の学生で(今の東京大学教養学部一・二回生)哲学青年であった。日光の華厳の滝に投身自殺し遺書の「**人生不可解**」の言葉に、多くの青年達の合言葉となり、真似をして自殺する者も相次いだという。昨今の姿と相通するものがある。

誰かが「死にたい」と思う社会は、誰もが生きて

づらい社会である。(同朋誌4月号)

でも、私たちは『見える世界』の中で生きていると考えている。しかし、見えない世界が大切である。見えない世界にしっかり支えられているのである。正行寺の境内の裏門の横にクスの古木がある。根もとは、大人3人をつなぐほどの大木だ。樹齡何年か不明だが、風雪に耐え、枝が折れたりの傷跡が大きな瘤となり、たくましく生き続けている。成長するにつれ根っこに置いてあった石を自分に抱え込んで生きている。根っこによって大石は邪魔であったであろうが、結果として、石があったからこそ今の姿に生き延びられたのかもしれない。



野間の大ケヤキ